

# 様々な制限のなかで工夫をこらした 讃美歌フェスティバル



7月15日（金）に第2回讃美歌フェスティバルを開催しました。本来は合唱コンクール（課題曲讃美歌＋自由曲）でしたが、新型コロナのために一昨年は中止せざるを得ませんでした。そして昨年は、讃美歌フェスティバルとして、観客なしでリスクをできるだけ避けるためにマスク（PTAから合唱用マスクの寄付がありました。）を付け、讃美歌1曲だけを歌うことにしました。それでも、各クラス工夫をし、1節目はアカペラ、2節目はピアノ伴奏つき、3節目は各パート分かれての合唱にしたり、踊りながら歌ったりと楽しいフェスティバルになりました。

今年は、昨年と同様に讃美歌フェスティバル形式にし、午前が高2・中学、午後は高1・高3の合唱で、午前・午後とも該当学年の保護者が各家庭2名までアリーナ2階ギャラリーから生で聴くことを可能にしました。新型コロナそして遺愛祭準備と並行して行うため十分な練習時間がとれなかったのですが、各学年、クラスとも心を一つにして素晴らしい演奏をしてくれました。ピアノだけでなく様々な楽器が伴奏として登場し、演出も見事で、視覚的にも楽しませていただきました。

午前と午後の最後には、白須先生指揮による音楽部（18名）による『さくら』の合唱がありました。さすが繊細で刈刈のきいた美しい合唱でした。

音楽科の白須先生、水田先生、讃美歌フェスティバル実行委員の皆さん、どうもお疲れさまでした。心から感謝します。

ところで、讃美歌の魅力とは何でしょうか？

讃美歌を聴き、歌うことで、心が清められていくこと。時には慰め、癒しが与えられ、時には心の底から元気がわいてくること。未来への希望がもて

るようになること。そして讚美歌には人生を支えてくれる魅力があります。

以前に、社会科の町田修先生から聞いたお話ですが、遺愛の卒業生が、若くして、重い病気になったそうです。病院の医師の必死の治療・看護師の懸命な看護、お母さんの祈るようなお世話にも関わらず、危篤状態に入ってしまった。その時に、その危篤の卒業生が何やら口を動かしているのです。何かの歌を歌っているようでした。お母さんが、何の歌か、よく聴いてみると、讚美歌でした。461番でした。「主われを愛す。主は強ければ、我弱くとも、恐れはあらし、我が主イエス、我が主イエス、我が主イエス、われを愛す。」この讚美歌461番を卒業生は亡くなる間際に歌っていたそうです。在学中は、なかなかのやんちゃ娘さんで、「礼拝なんて面倒くさい、なんでしなければならないの？」と公言していたお嬢さんでしたが、卒業するまでの間に、いつの間にかマイ讚美歌ができていて、思わず口ずさみ、彼女の人生を支えてきたようでした。

2022年7月16日



開会の挨拶



バイオリン伴奏



クラリネット、トロンボーン演奏  
(フルート、ホルン)



手をつないで合唱



ギター伴奏



突然3分の2の生徒が後ろを向き、  
パートが歌い始める時に前をむく演出



ピアノ伴奏



タンバリンとダンス



フルート伴奏